

令和5年7月1日（毎月1回1日）発行

昭和43年1月10日第3種郵便物認可

MICHISHIRUBE

みちしるべ

No.896

2023

7

July



Contents

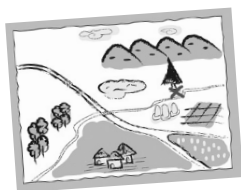
タカラノアリカ／杉江和彦	3
たましいのととのい／西浦優人	4
著名人と聖書 No.1 アンデルセン／古賀敬太	6
この意味教えて（カタカナ篇） No.19 パラクレトス／広沢 規	10
褐色の花嫁／松長誉嗣	12



☆当月号および過去1年分のみちしるべを、電子書籍版にてご覧頂けます。 <https://e-michishirube.com>

タカラノアリカ

杉江和彦



「徳川の埋蔵金」という言葉をお聞きになったことがありますか。これは、江戸幕府が滅びる前に密

かに隠されたと言われるものです。その価値は現在の価値で十兆円とも二十兆円とも言われています。そして現在に至るまで本格的な発見には至っていません。

その存在自体は昔から知られており、90年代にはテレビ番組とタイアップして、大々的な発掘調査

が行われたこともありましたが、その時の印象が残っている方も多いと思います。その埋蔵金が存在するかどうかは別として、私は「宝探し」という言葉に、何かワクワクする気持ちを抱いてしまいます。

宝探しと言えば、思い出すことがもう一つあります。それは、社会人一年目の新人研修のことです。当時の担当講師が声を張り上げて「宝は、君たちの心の中にある！ダイヤモンドがある！」と言っていました。

この表現からも分かるように、ダイヤモンドは価値ある物の代表例です。本物のダイヤモンドは日本では採れないので、この場合のダイヤモンドとは、個々の「才能」を指しているわけですが、当時、まだ初々しかった私は、自分の才

能とは何だろうと、真剣に自問自答したものです。このように、埋蔵金にしろ、ダイヤモンドにしろ、私は「宝がある」と聞くと、その「ありか」を知りたくなります。さて、神のことばである聖書は、本当の宝について次のように記しています。

「このキリストのうちに、知恵と知識との宝がすべて隠されているのです。」

（コロサイ人への手紙2章3節）
読者の皆さん！もしあなたが、知恵や知識を求めていらつしやるのなら、キリストの中にこそ、その宝が隠されていると聖書は教えてくれています！どうか、あなたがこの冊子を隅から隅までお読みになって、その宝をご自分のものとされますように。

たましいのととのい

西浦優人 まさひと

現在、若者を中心にサウナがブームとなり、新しいサウナ施設が続々と作られています。施設によって、より居心地の良い空間づくりがなされ、施設を作られた方のこだわりと、清掃や接客に至るまで、管理されている方々の心配りを感じることが出来ます。

2年ほど前に、私はサウナの正しい入り方（サウナ↓水風呂↓外気浴）を実践し、はじめて「ととのい」と呼ばれるものを体験しました。それ以来、サウナにハマりました。ととのいとは、サウナと水風呂に入った後、休憩することによって自律神経が整い、深いリラックス状態になることを言うそうで、サウナ愛好家の間で広まっていった表現のようです。

人間関係のストレスや仕事に追われ、疲れが溜



まっている現代人にとって、サウナは心身ともにリフレッシュさせてくれる最良の環境であるからこそ、これだけ流行しているのだと思います。

サウナの本場フィンランドでは、日本のサウナにある水風呂はなく、湖に飛び込んでサウナで火照った体を冷やします。ある雑誌に、湖がある大自然の中でサウナを楽しむフィンランド人に対して、取材した記事が載っていました。

「魂を洗っている気がする。いつもこうやって自然に助けられている。とにかく自然の中にいること

このように、私達は自然に助けられていると感じることがあるわけですが、同時にその自然環境が、私達が生きる上で最良の状態にできあがっていると感じることは 아닐でしょうか。

約1千億の惑星が存在すると言われている宇宙において、地球のように空気があって、緑が豊かに茂っていて、太陽との距離が、暑すぎず寒すぎない絶妙な距離で保たれている、人間にとってそんな都合の良い星は、地球以外にありません。まさに、「誰かの手によって、人間が生きるためによく考えられてこの地球が造られている」としか思えないのです。

私達が住みやすく、居心地の良い環境であるこの地球を造られたのは、聖書が語る、創造主であられる神様なのです。私達は、神様なしに生きられないし、生まれてくることすらできなかったのです。

私達がもはや当たり前を感じていることは、全て神様が私達に用意してくださっている恵みであり、

それらは神様が私達のために考えて造られたもので、私達の体もそれらのものによって保たれ、また癒やされるのです。

またサウナに入ることや魂を洗っている気がする、というインタビューをご紹介しましたが、聖書の神様は、このような単なる比喩ではなく、罪に汚れた私たちのたましいを、実際に清めてくださるのです。この神様が私たちのために遣わしてくださったイエス様を信じることによって、そのことが私たちの身に起こるのです。

「あなたがたは真理に従うことによって、たましいを清め、偽りのない兄弟愛を抱くようになったのですから、きよい心で互いに熱く愛し合いなさい。」

(ペテロの手紙第一：1章22節)

どうか、皆様が聖書が語るこの神様の救いを受け入れ、心身だけでなく、たましいが神様の御前にととのえられるようになりますように。

著名人と聖書（第1回）

古賀敬太

ハンス・クリスチャン・アンデルセン

（1807—1875）



アンデルセンの生涯

アンデルセンは、1807年に、デンマークの第二の都市、オーデンセの貧しい貧民街に生まれます。父は靴職人、母は洗濯婦でした。父はアンデルセンが11歳の時人生に疲れ、精神的に病んでしまい、死んでしまいます。しかし、極貧の中でも母親は信仰深く、アンデルセンに神様の話をしていました。そしてアンデルセンは、母親の祈りに導かれてクリス

チャンになります。彼は、1823年に、母親のことを回想しつつ、次のような詩を書いています。

「多くの眠れぬ夜のなか」

あなたの祈りはひびき

あなたの熱い涙は

私のために流されました

あなたが息子のために

熱心に主に祈つて下さったため

善き主はその敬虔な祈りを

きかれたのです！

アンデルセンは1819年にコペンハーゲンに来て、1828年にコペンハーゲン大学に最優秀の成績で合格します。そして24歳の時に作家になることを決意します。その後アンデルセンは、童話に挑戦して、「人形姫」、「マッチ売りの少女」、「みにくいアヒルの子」などの名作を次々に生み出します。アンデルセンの童話には「マッチ売りの少女」や「みにくいアヒルの子」のように、人目には貧しく、みすばらしく見える人物や動物が、神の目からすれば尊く、愛すべきかけがいのない存在として描かれています。

アンデルセンは生涯独身で過ごし、1875年70歳で天に召されました。彼の葬儀はなんと国葬で行われ、デンマーク中の人々が彼の死を痛み悲しんだと言われています。アンデルセンの墓の墓碑銘には、以下のような言葉が刻まれています。

「神おのが姿に像^{かたち}どり給いし人の霊は

朽ちることなく、消ゆることなし

地上のいのちは、永生の種子

肉はほろぶれども、霊は死なず」

この墓誌銘は、たとえ肉体は滅んでも、魂と霊は永遠のいのちを与えられて、天国で生きているという意味です。

以上のアンデルセンの生涯を覚えつつ、彼の代表的な作品で最もよく知られている「マッチ売りの少女」（1845年）と「醜いアヒルの子」（1843年）を通して、彼のメッセージを見ていきたいと思います。

マッチ売りの少女（1845年）

大晦日の晩、雪が降る寒い冬に、ひとりのみすばらしい少女が、帽子もかぶらず裸足でマッチを売っています。誰か買ってくれませんか。少女は寒さで死にそうなので、マッチをすって、指先を暖めよう

とします。後に彼女は死んでうずくまっている姿で発見されました。凍え死んだのです。悲劇ですが、少女の顔は微笑さえ浮かべていました。なぜでしょうか？

実は少女は、マッチをすった時に、世の中で唯一可愛がつてくれたおばあさんが幸福そうに光り輝きながら死んでいく姿を見て、「私を連れて行つてちょうだい！」と叫んでいました。すると、おばあさんは、小さい少女を腕に抱き上げて、光と喜びに包まれて、高く高く昇っていきました。アンデルセンは、「二人は、神のもとに召されたのです」と記してい



ます。

私は、このおばあさんの姿に、極貧の中でも神様を愛して天国に召されていったアンデルセンのお母さんの姿を認めるのです。そしてマッチ売りの少女は、アンデルセン自身ではないでしょうか。アンデルセンの墓誌銘「肉は滅ぶれども、霊は死なず」とあるように、イエス様を信じる人は、天国に導かれ、永遠に神の愛に包まれます。そこにアンデルセンの希望がありました。

みにくいアヒルの子（1843年）

アヒルのお母さんが卵を産み、雛が現れますが、最後に卵からかえった雛は、灰色のみにくいアヒルの子でした。通常アヒルの雛は金色をしており、白鳥の雛は灰色です。同じ時に生まれたアヒルの子からいじめられ、家から逃げ出しますが、どこに行っても嫌われ除け者にされます。鴨、ガン、猫やニワトリからもいじめられて、冬の氷で凍りついて死にそうになりますが、ひとりの百姓に助けられます。ある日、みにくいアヒルの子は、三羽の美しい白鳥

を見て、殺されるのを覚悟で近づいていきます。その時にくいアヒルの子は、水に映った自分の姿を見ますが、それはなんと白鳥の姿でした。「あのぶかつこうな灰色の、みんなに嫌がられた、みにくいアヒルの子ではなくて、一羽の立派な白鳥でした。」この童話は、白鳥が喜びの声をあげて、「僕が、みにくいあひるの子だった時は、このような幸福は夢にも思わなかった!」という言葉で終わっています。私たちは、この童話の意味をどのように理解したらいいのでしょうか。白鳥の子は雛の時には灰色なので、大きくなって成長して真っ白になっただけだと考えることもできるかもしれませんが。しかし聖書の視点から考えると、神のまえに醜く、誰からも相手にされなかった弱い、罪に汚れた者が、イエス様の十字架の血潮によって清められ、罪が覆われて、白鳥のようにされたことを示していると考えることができます。聖書は、「たとえ、あなた方の罪が緋のように赤くても、雪のように白くなる。」(イザヤ書1章18節)と約束しています。

イエス・キリストを信じ、心に受け入れるものは、

神の子とされると聖書は約束しています。それはあたかも、乞食のようにボロボロの服を着ていた者が、王子にされ、立派な清い服を着せられているかのようです。

アンデルセンが教えるもの

お母さんによって、真実な信仰を教えられたアンデルセンの心温まる童話を通して、私たちは人間的にいかにも弱く、貧しく、みにくいように思われたとしても、またたとえ人々から仲間はずれにされ、一人ぼっちであったとしても、神の目は人の目とは異なり、わたしたち一人ひとりを尊いものとみなし、愛しておられることを知ることができます。それは、神がひとり子イエス・キリストを私たちの罪のために十字架につけるほどまでに、私たち一人ひとりを愛されたことによって明らかです。

「私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死なれたことによって、神は私たちに對するご自分の愛を明らかにしておられます。」

(ローマ人への手紙5章8節)



この意味教えてーカタカナ篇ー

広沢 規^{のり}

No.19

● パラクレトス

日本人の信仰心は、多神教の宗教であると説明されます。祖先から引き継がれてきた神仏及び先祖また自然が信心の対象になるからです。その一方で、キリスト教またはユダヤ教の信仰は、一神教の宗教であると説明されます。それは唯一の神（創造主）が信仰の対象になるからですが、厳密に言うくと、聖書が証しする神は、こうした多神教の神とか、一神教の神という言い方では説明することができない御方なのです。

なぜなら真の神は唯一の存在者なのですが、同時に、「父なる神」と「子なる神（イエス・キリスト）」

と「聖霊なる神」が、それぞれが神格を持たれ、それぞれが自存している複数神でもあるのです。「三位一体」という言葉自体は聖書の中にありませんが、真のクリスチャンは皆、この「三者にして唯一である神」を信じています。このような神は、他に見出すことはできません。

自然界（被造物）は、この神の創造による作品です。ですから自然界の様々な原理（法則）と現象の中には、神の本性である三つで一つであるという真理が見事に仕組まれています。以下、その実例を挙げます。



【元素】陽子・中性子・電子という三つの素粒子から成り立っています。

【水】固体（氷）・液体（水）・気体（水蒸気）と三態の変化をします。

【時間】過去・現在・未来の三つの時から成り立っています。

【電気】電流・電圧・抵抗の三つの要素で成り立っています。

【速度】時間・距離・速さの三つの要素で成り立っています。

【色】赤色・青色・黄色の三原色から成り立っています。

【音楽】メロディー・ハーモニー・リズムの三要素で構成されています。

【天】第一の天（大気圏）・第二の天（宇宙空間）・第三の天（天国）から成り立っています。

このように神が三位一体なる御方なので、その作品である自然界の原理と現象も、ご自身の本性をよく表現していると言えます。

さて、ギリシャ語の「パラクレトス（παράκλητος）」とは、三位一体の神のひとつである「聖霊」のことです。主イエスは、この聖霊のことを「もう一人の助け主」（ヨハネの福音書14章16節）、「真理の御霊」（同14章17節）と言われました。新改訳聖書二版では、「援助のためにそばに呼ばれた方」「とりなしてくる方」であると説明されています。

先駆者ヨハネが、ヨルダン川で、イエスにバプテスマを授けた時に、天が開けて、聖霊が鳩のように下って、この御方の上に来られました。すると天から「これはわたしの愛する子」（マタイの福音書3章17節）という父なる神の御声が聞こえました。父子、聖霊の三つの神が共に現れた、栄光に輝く場面でした。こうして神の子イエスは公の生涯に入られました。

皆さまも、聖霊の助けをいただいて、「イエスは主です」（コリント人への手紙第一・12章3節）と心から告白し、父なる神に向かって、「アバ、父」（ローマ人への手紙8章15節）と親しく呼びかけてみてください。

褐色の花嫁

松長 誉嗣^{たけし}

―聖書のラブ・ストーリー―

～雅歌より



今年も暑い季節を迎えようとしています、暑さのみならず、紫外線が気になる方もおられるでしょう。今日、紫外線を受けることで皮膚がんを発症したり、美白のため日傘や日焼け止めが欠かせないという方も大勢おられます。

オゾン層の破壊によりオゾンホールが発生し、安心して日光浴を行うことができない今日において、過度に太陽光を浴びる行動は避けるべきなのでしょうが、2018年12月の国際環境衛生学会誌では、日焼けによるリスクより、太陽光を浴びないビタミンD不足による健康リスクのほうがはるかに高いと

明示したそうです。たしかに昔は小麦色の肌と表現され、健康的なイメージでした。時代とともに変わる常識を見分けることは難しいのかもしれませんが。

さて旧約聖書の「雅歌」の中にも、小麦色の肌、日に焼けて浅黒い肌になってしまった女性が登場します。彼女は自分の肌のことを気にして、このように言っています。

「あなたがたは私を見ないでください。私は日に焼けて、浅黒いのです。」（雅歌1章6節）

彼女の名前や詳しい素性などは、ほとんどわかっていません。ただ、「シユラムの女」(同6章13節)とだけ記されており、シユラムという名称自体、何を意味するのが不明で、さまざまな説があるようです。また彼女の家柄も特に高貴というわけでもなさそうです。

しかし、そのような彼女を、周囲の人の目も憚^{はば}らず、熱烈に愛した男性がいました。その名前はソロモン、紀元前約1000年頃のイスラエルの王として知られる人物です。

通常、一般人がいきなり王様に言い寄られたら、嬉しいというよりも、当惑してしまふ気持ちの方が強いかもしれません。また王様なら、王の権力を使い、気に入った女性を無理やり召し抱えることは簡単であつたはずですが、ソロモン王はそのようなこととはしませんでした。相手を見下すことなく、あくまで一人の女性として敬意を表し続けたと思われるます。

そして彼女に対し、次のように語りかけ、最高の賛辞と愛の言葉を送ったのです。

「女の中で最も美しいひとよ。」(同1章8節)
「ああ、あなたは美しい。わが愛する者よ。」

(同15節)

もしかしたら彼女は、最初はソロモンの気持ちを素直に受け入れることは出来なかったかもしれない。しかし自分に優しく接し、周囲の人の評価などにせずに、自分を愛してくれる彼に、身分の違いを超えて次第に惹かれていったのではないだろうか。やがてソロモンは彼女を王妃として迎え入れることになります。(同4章6～11節)

王様が一般庶民の女性を王妃に迎えるとなると、現在でもトップニュースになると思いますが、このような昔の男女のロマンスが、なぜ聖書に含まれることになったのでしょうか?このような題材は聖書にふさわしくないと考える方もおられるかもしれませんが

せん。それは今日の私たちに対して、神様（イエス様）の愛を教えるためであつたからなのです。

聖書にこのように記されている箇所があります。

「わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。」（イザヤ書43章4節）

これは神様の私たちに対する愛の告白ともいえることです。そもそも聖書が神様から私たちへのラブレターと言われることがあるぐらいです。ですからソロモンとシュラムの女の愛のやりとりをとおして、私たちに対してご自身の愛を教えようとしておられても、決して不自然ではないと思います。

シュラムの女は肌の黒いことを恥じていましたが、私たちはそれよりもはるかに深刻な、罪というものによつて、心が真っ黒になっているのです。実は肌の色のような外見の事柄より、そのことの方がはるかに重要な問題なのです。

それにもかかわらず、神様は私たちのことを愛していただくさつており、イエス様の十字架によつて、

私たちの罪をきれいに拭い去り、私たちを花嫁のように迎えてくださるのです。

あなたは、聖書のお話をどのように受け止めているでしょうか。神様の愛のメッセージを価値のないものと思っていないでしょうか。しかしその本当の価値に気づき、神様のあなたに対する愛に応えるならば、神様はあなたを永遠の愛の交わりの中に入れてくださいます。そのことは、あなたを愛してくれる人と結婚することにも似ています。

ソロモンは、自分の花嫁となるシュラムの女を愛を、次のように言つて賞賛しています。

「私の妹、花嫁よ。あなたの愛は、ぶどう酒にまさつて麗しく、あなたの香油の香りは、すべての香料にもまさっている。」（雅歌4章10節）

同様に、私たちが罪を取り除かれ、神様を愛する者へと変えられたとき、神様は私たちの愛をとて

喜んでくださるのです。

さらにソロモンと結婚した後、シユラムの女はこう言いました。

「私たちは朝早くぶどう畑に行き、ぶどうの木が芽を出したか、ぶどうの木が花を咲かせたか、ざくろの花が咲いたかどうか見ましよう。そこで私は、私の愛をあなたにささげます。」(同7章12節)



彼女の家はぶどう畑を所有していたようですが、以前の彼女はその番はしようとはしませんでした。(同1章6節) おそらくその仕事がつまらない、あるいはつらいと考えたからでしょう。しかしソロモンと結婚した時、夫のぶどう畑に彼とともに行くことに喜びを感じるようになりました。

なぜならそのぶどう畑に夫が関心を持っていたからです。ですから愛する夫の喜ぶ顔を見るためにも、ぶどう畑に心を留めるようになったのでしょう。愛によって人が変えられることの事例と言えます。

またそのぶどう畑は、現代の私たちにとっては、集会(教会)のことを教えているようにも思えます。(コリント人への手紙第一・3章9節参照)

皆様も、いつの時代でも変わることもない、神様の愛をしっかりと受け止められますように。

みちしるべ7月号 第896号

令和5年7月1日(毎月1回1日)発行

発行所 伝道出版社

〒183-0056 東京都府中市寿町 2-8-9

TEL 042-366-7760

FAX 042-366-7790

編集人 伝道出版社 編集部

<https://dendoshuppan.shop-pro.jp/>

印刷所 株式会社 共同印刷所

昭和43年1月10日第3種郵便物認可
令和5年7月1日(毎月1回1日)発行
みちしるべ7月号 第896号

伝道出版社
〒183-0056 東京都府中市寿町2-8-9



定価1部50円+税
送料63円
振替00140-9-27336

肩こりに悩まされ、先日私は整体院へ行きました。「肩、お辛かったですね」と言って先生が初めにほぐしてくださったのは、足の裏でした。なぜ足? と思いながら施術を受けていたその時、激痛が走りました。「足腰が硬いと、姿勢が崩れて肩こりの原因になるんですよ」とのことでした。その先生のおかげで、肩こりの根本にある問題は、実は足腰の硬さであることが分かりました。

人は悩み迷いながら、死に向かって生きている病人だ存在です。聖書は、人の悩みや苦しみの根本にある問題は罪であると語ります。聖書を通して神様の診察を受ける時、人は初めて自分の罪が分かるのです。

「医者が必要とするのは、丈夫な人ではなく病人です。わたし（キリスト）が来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためです。」
(マルコの福音書2章17節)

キリストは、人を罪と死から解放するためにこの世に来られたいのちの医者です。治療費は、医者であるキリストご自身が私たちの身代わりとなって十字架でいのちを捨ててくださったことによって、既に完全に支払われています。私たちは、神様が用意された治療をただで受けるように招かれている病人なのです。
(福井 雄一)

なお、くわしく聖書について知るために、下記の所へぜひおいでください。